

2019 年度研究助成 研究実績報告書

代表研究者	石原凌河
研究テーマ	歴史災害を題材とした逆ベクトル型防災教育プログラムの開発と多面的効果の検証

< 助成研究の要旨 >

わが国では、甚大な被害を出した災害が多く存在するため、過去の災害の反省点を生かした多種多様な防災教育プログラムや防災イベントが全国各地で行われている。しかしその多くは、災害に関する知識や技術を児童・生徒に教え込もうとする「知識伝達型」のアプローチにとどまってしまう。また、防災は、人生の「生き方」に関わる重要な営みであるにもかかわらず、単発の授業やイベントのみに留まり、その効果を測定することもないまま終わっている場合も多い。

そこで本研究では、学習を通して得られた知識や経験を、学習者自らが「伝え手」となって外部者に発信する「逆ベクトル型」の防災教育手法に着目し、歴史災害を題材とした一連の防災教育プログラムを開発するとともに、その効果を多角的な観点から測定することを目的とする。

本研究の調査対象フィールドである和歌山県広川町は、和歌山県の中央北寄りに位置する人口およそ 7,200人の町である。南海トラフ巨大地震が発生すると、約40分で巨大津波が来襲すると予測されている。1854年の安政南海地震の際に多くの村人を津波から救った「濱口梧陵」は広川町(当時は広村の偉人であり、『稲むらの火』のエピソードで広く知られている。梧陵は、津波により職を失った村人を雇い、将来の災害に備えるために「広村堤防」を造るなど、町の復興にも尽力した。このような梧陵の偉業は現在にも語り継がれ町の行事や祭りでも伝承されている。2007年には津波防災の学習施設である「稲むらの火の館」がオープンし、毎年、全世界から5万人ほどが来館している。

2016年度から「稲むらの火の館」の来館者に地元の広小の6年生が防災に関するクイズを出題しながらガイドする「こども梧陵ガイド」の取り組みを開始した。これまでの取り組みを踏まえて、今年度は「逆ベクトル型」の防災教育プロジェクトを実施し、一連の取り組みを防災教育プログラムとして開発した。2019年7月から6年生児童とクイズの作成や練習、交流を重ねており、同年11月16日から17日に「第4回こども梧陵ガイド」を実施した。開発した防災教育の多面的効果を検証するために、1) 「第4回こども梧陵ガイド」に参加した児童に対する面談調査(n=28)と 2) 過去に「こども梧陵ガイド」に参加した卒業生 —現在の耐久中学校の3年生— の面談調査(n=19)、以上の2つの調査を実施した。「こども梧陵ガイド」では、のべ約300名の来館者を前にガイドすることができた。翌日の交流授業では、6年生児童に「振り返りシート」の記入を課し、感想や意識の変化などもあわせて聞き取った。

本研究の知見から、「稲むらの火の館」の来館者以外にも様々な人との関わりが生まれ、しかもそれらの多くは双方向の「交流」となっていた。換言すれば、「知識伝達型」の防災教育手法で得た知識を、「逆ベクトル型」のアプローチによって多様な「他者」と共有する経験を重ねたということである。広小の6年生からは、このようなインタラクションを通じて、将来に向けた学びの意欲が備給されるという好循環も見られた。

ところで、耐久中学校での調査によれば、小学校時代の記憶は保持されており、学びの意欲は依然あるものの、防災関心度は低減しているようであった。中学校の授業において、「逆ベクトル型」の防災教育の機会が不足している可能性がある。このことから、「こども梧陵ガイド」の卒業生が次世代のガイド役を指南する、あらたなインタラクションを生み出すことを提案したい。ベクトルの多様性と充実度をモニターしながら、今後も実践を持続的に展開していくことが望まれる。